

雲の柱に導かれた 賀川豊彦と聖書

鈴木範久 すずきのりひさ 立教大学名誉教授

死線を越えて

少年時代に結核を病んで療養の日々を送っていたころ、賀川豊彦の「死線を越えて」に出会った。同書にひかれた最大の理由は、賀川が結核にかかり、愛知県蒲郡で療養中にそれが書かれたことだった。蒲郡は、わたしが住んで病気を養っていた町のままに隣である。歩いても行けるところだった。海に面し気候が温暖で、山の斜面にはミカン畑がひろがっていた。

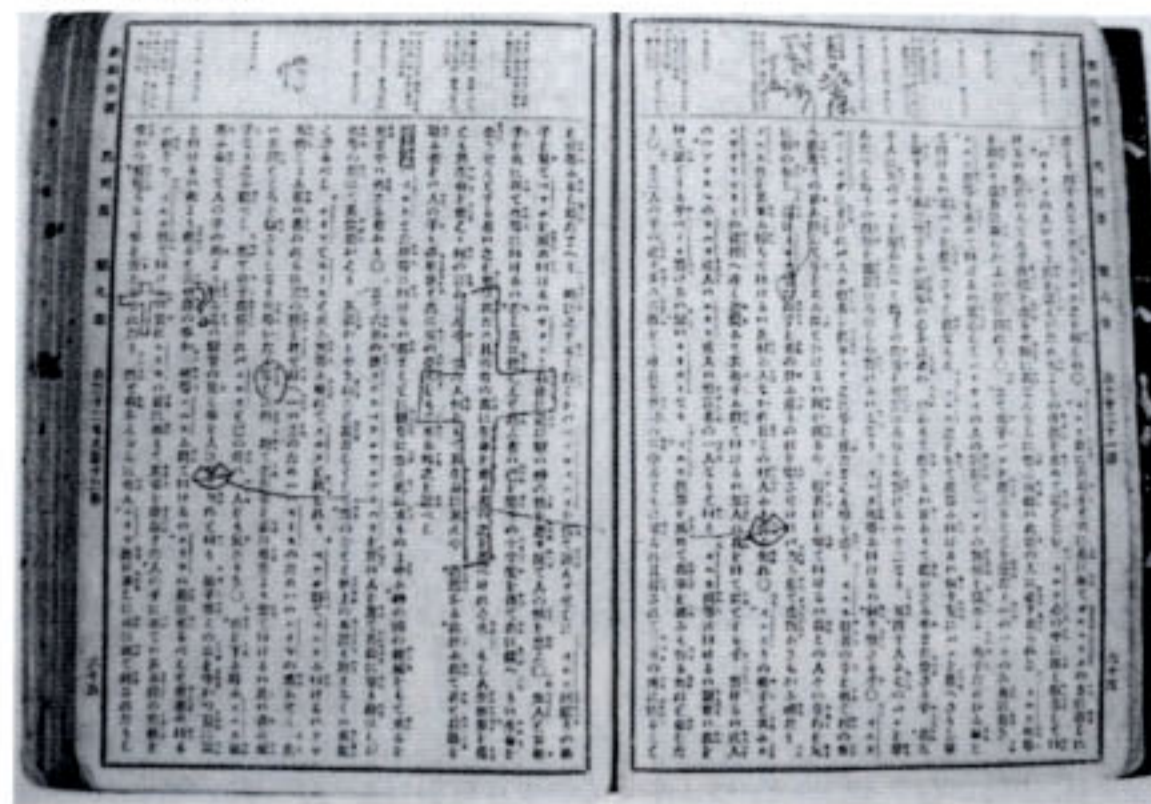
当時、賀川はまだ一九歳、時代こそ隔たっているが、わたしも一七歳である。賀川は、蒲郡に住む前年、近くの岡崎教会の伝道を手伝っていた。わたしも岡崎教会の附属幼稚園以来、同教会に出入りしていたので、結核療養の大先輩である賀川に、いっそう

親しみを抱いた。賀川は豊橋教会の伝道も手伝ったから、三河地方には土地勘があり、療養に適した蒲郡を選んだのだろう。これ以後、賀川は絶えず気になる存在となった。

神の乳房

青年時代になって、たまたま通りかかった東京の教会の正面に、説教者として賀川豊彦の名前が大書されていた。ためらいなく中に飛び込んで賀川の話をはじめ聞いていた。他の牧師たちの説教との大きな相違は、背後の黒板にさかんに太古の地質年代を書きつけ、白墨の粉を舞い上がらせながらの話し方である。このときは、正直なところ、賀川の話の意図がよくわからなかった。終わると、ただちに「決心者は前に出てくさい」との司会者の声があり、その声に促

『引照 新約聖書』



されるようにして大勢の聴衆が前に進み出した。結局、わたしは席を立たずじまいだった。

その後まもなくして、アメリカに長く滞在していた友人から、同地で賀川の詩を読んだ感想を聞かされた。「神の乳房は 太くて大きい」「女性讃美と母性崇拜」という詩であった。友人は、外国にあって実に異様な表現として受けとったという。また、マリア観音にも通じる日本的な発想と言った。それ以来、賀川のものを読むたびに、「涙の二等分」とか「神の懐」というような感情的、包容的な言い回しが絶えず記憶されるようになる。

他方、賀川は、造船所の争議を指導して逮捕されるほど強い人物でもあった。弱者に対する深い愛、その反面の強さ、加えて差別感、これらの矛盾が、私が少年時代から長年、賀川に関心をもちながら彼についてほとんど言

及できなかった理由だった。

雲の柱

昔に戻るが、毎週のように神田で、「賀川豊彦伝」の著者、横山春一さんと、内村文獻の収集家であるペリカン書房の品川力さんをまじえて雑談する時期があった。お二人は、年齢的にも人生の先輩であり、わたしはもっぱら聞き役だった。あるとき、賀川豊彦に関する質問をいくつか用意しておいて横山さんに尋ねた。

「賀川豊彦がもっとも好んだ聖書の言葉はなんでしょうか」

「それは、雲の柱。だと思いますよ」

これが横山さんの答えだった。

そういえば、賀川の雑誌に「雲の柱」（創刊一九二三年一月）があり、表紙には「雲の柱」に導かれる人の挿し絵があった。言うまでもなく旧約聖書出エジプト記第一三章二二節の次の言葉によっている。

主は彼らに先立って進み、昼は雲の柱をもって導き、夜は火の柱をもって彼らを照らされたので、彼らは昼も夜も行進することができた。

まもなくして、賀川によって描かれた「雲の柱」の絵の含まれた冊子を手に入れた。こ



れには「一九二八・一〇／賀川生／津軽海にて」と付されている。一九二八年といえば、賀川の提唱した全国伝道の展開中である。その途中で青森県入りしたときだろう。賀川は、「雲の柱の導くままに」と記した同じような構図の絵を好んで描いたようだ。賀川がなぜ「雲の柱」を好んだのか、それ以上は横山さんに聞かずじまいだったが、賀川が「出エジプト」により脱出をはかったものが、その活動と深く結びついているの思いはした。

賀川の用いた聖書は、その一生にわたり数多くあったと思うが、そのうちの一冊を、文字通り覗き見たことがある。そのとき強い印象を受けたのは、あちこちに多く書き込まれた大小の十字架の図である。この十字架の図と賀川のもつ贖罪思想とがどのような関係にあるのか、この絵解きも残されたままである。



賀川豊彦